

THE NEW YORK TIMES **NATIONAL** SATURDAY, AUGUST 21, 2010

Beliefs

Sex Scandal Has American Buddhists Looking Within

By MARK OPPENHEIMER

Published: August 20, 2010

信仰

セックススキャンダルに、内省するアメリカ仏教徒たち

マーク オッペンハイマー記者

2010年8月20日 掲載



SUZANNE D'CHIILLO/THE NEW YORK TIMES

The Zen Studies Society monastery. The society's abbot was linked to a series of affairs.

既存の宗教は、遅かれ早かれ、指導者の引き起すセックス騒動に見舞われる事になる。その中には、婚姻外の不倫、不適切な相手（信者、未成年）とのセックスがあり、不犯を守るとされている場合には、セックスそれ自身が問題となる。

しかし、これらの背信行為にどう対処していくかには、各宗教によって大きな違いがある。ユダヤ教、プロテスタントの場合には、各地域の信者グループがあり、そこで、どこまでなら許

されるのか、また、どのような懲罰が課せられるべきかが決められる。カトリックの場合には、事例の起こった地域からの報告に基づき、全世界に張り巡らされた、組織の階層構造で対処が決定される。そして仏教の場合には、．．． どうもはっきりしない。

ある専門家は、問題の根本は、仏教では、師と弟子との関係が、西洋での場合と違って明確に規定されていない点だと言う。常に遵守されているわけではないが、キリスト教、ユダヤ教の祭司は、許される行為と、そうでない行為の境界線を知っている。医者も、守るべき倫理規範を持っている。人の心を扱う司祭のような、権威権限を持つ教師のような、或いは、心理療法におけるカウンセラーのような - 仏教の師は、それらのどれでもあるようでいて、どれもでない。仏教徒のコミュニティーを意味する、“サンガ”でさえ、師—弟子間の性的関係を禁ずるものの、多くの場合、実際に違反を取り締まるような制度がなく、これが問題を生じさせ得る元となっている。まさにこれが、今、ニューヨークの或る禅グループが、体験していることなのだ。

現在77歳になる嶋野栄道氏は、1965年以來、マンハッタンの67th通りにある禅堂と、敷地1400エーカーに及ぶキャッツキルの禅堂を本拠とする、日本仏教グループ、“ゼン（禅）・スタディー・ソサエティー（Zen Studies Society）”の住職であり、その精神的指導者である。その在職期間にわたり、既婚者である嶋野氏と、女性弟子及び、その他の女性達との情事の噂がずっと囁かれて続けて来た。ところが、2008年には、そのような噂は、最早、無視できなくなった。と言うのも、その年、アメリカ仏教会の指導者であり、Buddhist Peace Fellowshipの創設者である、ロバート・エイトキンス氏が、ハワイ大学マノア校に封印されていた、自身が寄贈した文書を公開したからである。

その中には、嶋野氏について、エイトキン氏が1964年から2003年に渡って保存していた文献が含まれていた。今年8月5日に死去した、エイトキンス氏は、1960年代に、嶋野氏にハワイで出会い、行動を共にした。以来、エイトキンス氏は、40年以上に渡って、嶋野氏の情事の記録を書き残した。その記録は、嶋野氏の情事の相手をつとめる事となった女性達が、彼を信じて語ってくれた会話に基づいている。

1995年、エイトキンス氏は、ゼン・スタディー・ソサエティーの最高意思決定機関であるボードのプレジデントに宛て手紙を送り、以下のように述べた。「過去30年以上にわたり、我々は、嶋野老師の元弟子の多くにインタビューをしてきました。そこで出てくる話は皆、同じです。一見、賢く、情け深く見えた師は、結局は、その信頼を巧みに操り、彼女達と性交渉を持ち、性虐待をするに及んだのです。」（“老師”或いは“師”は、日本の敬称であり、名前の後につけられる。）

エイトキンス文書は、直に、インターネット中を駆け巡った。6月15日、嶋野氏のゼン・スタディー・ソサエティーの最高意思決定機関であるボードのディレクターたちが集まり、このエイトキン氏の申し立てを協議した。ボードメンバーの一人である嶋野氏は、この会議には出席

していなかったが、ほとんどのメンバーは、その告発中には真実が含まれている可能性が非常に高いと判断した。

匿名を希望する、一人のボードメンバー（ボードディレクター）はこう言う、「私は、その告発の元となる情報が、さまざまな多様な源から発せられていることから、信用に値すると思いました。これが虚偽であるとは全く思いませんでした。」

その会議で、ボードメンバーたちは、ゼン・スタディー・ソサエティーのための、新しい倫理規定の作成を開始した。その中で、彼らは、嶋野氏の過去の過ちを認め、それを言及した。別のボードメンバーである、クリス・フェラン（Chris Phelan）は、嶋野氏自身が、その草案を読み許可した、と言う。さらに、「嶋野氏は（これを見たとき）、何か特に反応したり、（この文面が）故ない誹謗中傷だ、とか言いませんでした。」と続けた。

とはいえ、何人かのボードメンバーは、ニューヨーク・タイムスに対し、嶋野氏の女性弟子達との関係は、ずっと昔に終わっており、嶋野氏が、引き続き、弟子を指導する事に問題はない、と述べた。

「私の知る限りでは、15年もの長い月日が流れたのです。」シアトル・ゼン・テンプルの住職であり、ボードメンバーであるジョー・マリネロ（Joe Marinello）は言う。

しかし、7月19日、ボードは、嶋野氏が、“聖職者による不祥事”という告発を受けて、ボードから辞任する、と発表した。この声明は、アメリカ仏教誌であるトライシクル（Tricycle）からの、スキャンダルに関する質問の、その回答として発表された。以来、ボードは、嶋野氏は2012年までは、住職を務めるが、副住職はすでに任命されており、嶋野氏は新しい弟子の指導にあたらぬ、と言っている。

では、何が変わったのだろうか？

師と弟子との間の“性的勧誘或いは性交渉”を禁ずる事項を含む、新しい倫理規定作成にボードが着手してから一週間の後、ボードは、新たな事実の露呈に直面するのであった。

過去2週間に及ぶ取材の中で、マリネロ氏を含む4人のボードメンバーは、7月21日、一人の女性（名前を明かされていない）が、キャッツキルの禅堂での夕食中、嶋野氏も臨席の中、立ち上がり、過去2年間、嶋野氏と、合意の上での性交渉を持っていたことを公表した、と言った。数人（several: 7, 8人）のボードメンバーは、その後、嶋野氏と会話し、氏がその関係を認めたと語った。水曜日には、ゼン・スタディー・ソサエティーは、声明を発表し、「今年7月に、ある女性が榮道老師と不適切な関係にあった」事を認めた。

嶋野氏は、数回（several: 7, 8回）に渡る（ニューヨーク・タイムスからの）電話に、応答しない。

この小さいが象徴的な声明、つまり嶋野氏の自らのボードからの引退は、二つの意味で、アメリカの宗教界が、この10年でどう変容したのかをよく物語っている。

第一に、今回の最新の不祥事は、以前と異なった新しいニュース・メディアの文化を通じて展開した。聖職者による不祥事は、勿論、非常に注目を集めるテーマである。インターネット上では、ブロガーたちがエイトキンス文書を吟味し、さらにこの不祥事を自身のブログで言及する。「インターネットが圧力を形成しました。」と一人のボードメンバーは言う。ボードメンバー達は行動せざる終えなかった。無関心と見られることは、許されないことだった。

第二に、師と弟子の関係に、より敏感になった、アメリカ仏教界の事情があった。

以前には、そのような関係は、極めて神聖なものと思われていたために、情事は必ずしも非難の対象にはならなかった。

「心理療法におけるカウンセラーとの関係と異なって、仏教の師弟間には、何が適切で何が不適切かについては、いまだ、議論が分かれるところです。」と、トライシクルの編集者であるジェームス・シャイーン (James Shaheen) 氏は言う。また、師弟間のセックスを伴った関係については、「大抵の人は、『やはりしないでおこう。』と言う所に落ち着くのでしょうか。」と続ける。

しかし、禅仏教徒の間には、性に関して否定的だと見られることへの、文化的な嫌悪感もある。70年代と80年代にサンフランシスコ・ゼン (禅) ・センターの住職であった、リチャード・ベイカー (Richard Baker) 氏を描いた、2002年に刊行された、マイケル・ダウニング (Michael Downing) 氏著作の“Shoes Outside the Door”という本の書評の中で、フレデリック・クルーズ (Frederick Crews) 氏は、以下のように述べている。「ベイカー氏の一連の情事は、アメリカ仏教界では、決して特殊なことではなく、許すことも出来たかもしれない。しかし、それに關し、嘘をつきとおした彼の行動は、許しがたい。」

高名な仏教界の指導者による、セックス、アルコール依存、麻薬の乱用は、その事実から目を背けたり、見ても無関心を装う信者達によって、ずっと、看過されてきた。例えば、コロラド州ボルダーにナロパ・インスティテュート (Naropa Institute、現在のNaropa University) を創設した、チベット仏教の指導者である、チャンガム・テュルンパ・リンポチェ (Chogyam Trungpa Rinpoche) 氏は、頻繁に、酔態を公に晒していた。仏教ジャーナリストであるケイティ・バトラー (Katy Butler) 氏は、“アメリカ仏教の闇に出会って (Encountering the Shadow in Buddhist America)” と題した1990年の記事の中で、テュルンパ・リンポチェ氏の、公然たるアルコール依存症について語った。

「私達は、すぐ目の前に有るものを否定することに慣れてしまい、無力感を感じていました。そして、自分自身の心の中が分からなくなってしまったのです。」とバトラー氏は語った。

1988年から1990年に、嶋野氏の、マンハッタンアッパー・イースト・サイドにある禅堂（ニューヨーク正法寺）で指導的な役割を担ったクラーク・ストランド（Clark Strand）氏は、アメリカにおいては、特に、アジア仏教の性に関する倫理観は、変わらなければならない、と言う。

ストランド氏は続ける。「アメリカで今、起こっている事は、多くのアジア仏教の指導者が、この地に来て初めて、女性の参加する、宗教のコミュニティに接した、ということなのです。そして、彼らは、そのような状況に対処する用意を、必ずしも、持ち合わせていなかったのです。」

「露骨な言い方をすれば、日本では禅僧がこっそり抜け出して売春婦を買い、それが大目に見られる土壌があります。しかし、アメリカでは、自分自身の禅堂であっても、一線を越える行為は、それほど簡単に、目こぼしされるものではなかったのです。」

E-mail: mark.oppenheimer@nytimes.com; twitter.com/markopp1